

---

**s i d e b y s i d e**

美咲 堇

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

side by side

### 【Nコード】

N7726B

### 【作者名】

美咲 堇

### 【あらすじ】

高校生の「わたし」はある日、中学一年の頃に好きだった人からデートの誘いを受ける。結局二人でかけたが、「わたし」はなぜか彼の隣にいるとき緊張した。好きじゃない、でも嫌いじゃない。微妙な位置で揺れていた気持ちだが、どちらかに傾きそうになる。心地良い彼の隣で。

なんだかよく分からない。気持ちが高ぶっているときに現れる期待感と、予測不能なことが起きるような気がする緊張感。

「ふう……」

駅の階段を昇りながら、嘆息とも吐息ともつかない息を漏らす。階段を昇り切って顔を上げると、そのこの広場の手摺りによりかかった一人の人と目が合った。

わたしは手を上げて微笑んだ。なぜか。自分でも知らないうちに、勝手に笑みがもれていた。

わたしが近付くと、彼は手摺りから離れてこっちへ来た。

ことの始まりは二カ月前。

中学校時代の友人である彼からメールがきた。何通かメールを交わして話題が突きたころ、

「話題が尽きましたねえ」

わたしは正直にそう送った。少しして、割と早く返事が返って来る。

「そうですねえ……そうだ、今度どこか行かない？」

さらりと読んで、また読み返す。

「なにそれ、デート？（笑）」

あえてふざけて返すことぐらいしか、わたしにはできなかった。

「まあ、そうなりますか（笑）」

わたしだって付き合った人の一人や二人はいないわけではない。だけど、デートはしたことがないというのはしばしば友人にも驚かれる。付き合っても、デートするまでに至らずに終わるのがわたし

の恋愛パターンだったからだ。

だから、彼のその言葉にわたしは戸惑い、焦った。

彼のことは嫌いじゃない。むしろ友人として良い人だと思う。あくまで、友人として。

どう答えようか迷ったけど、それは数瞬のことであつた。

「いいよー」

と返信していた。断ることが、どうしてできよう。

中学一年の頃は好きだった相手なのに。

ホームのベンチに腰掛ける。ただそれだけなのに、こんなに緊張している。そういえば、昔から彼の隣はそうだった。

彼とは今は違う学校に通っているから、互いの学校の話とか、テストの話とか、まだ電車が来ないからいろんなことを話した。

ホームのベンチの端っこ。彼はその隣に。

わたしの横には、なんのための物だかよく分からない機械があつて、吹いている風に加えて、そこからくる風にまで晒されてかなり涼しい。三月とはいえ、外はまだ寒い。

「そっち寒いべ」

そのことに気付いていたみたいで、そう言つて彼は席を代わつてくれた。

「あ、ありがとう」

その行為はどこにも不自然さを感じなくて、どこか不思議だった。それにしても、わたしは人の優しさに弱いのだろうか。さっき「寒いね」と言つたら頷いた癖に、自分だつて寒いだろうに。

どこに行くかとか、わたしは本当に何も考えてなくて、結局駅前

からバスでショッピングセンターまで行った。

バスに乗ったときもわたしに席を譲ってくれたし、どこに行っても着いてきてくれて、常にわたしがちゃんと着いてきているか気にして 心地よかった。

お昼も奢ってくれた。わたしがお金ないからバイトしたいって言ったこと、覚えていたみたいだった。しかもバイトはできなかった。

ゲームセンターに行つて、景品のキーホルダーを指差して、  
「かわいい」

とわたしが呟くと、真剣な顔で悩んでいた。

「これは無理でしょ」  
と言うと、頷いて無理と言ったけど、一回りして戻ってくるとまたそのゲーム機の前で立ち止まった。

二回やってみただけど、やっぱりだめだった。だけどそれだけでわたしは嬉しかったことを、彼は気付いているんだろうか。いや、気付いてないと思った。

駅までの帰りのバスの中、来たときとは違って中はがら空き。二人掛けの席に先に座った彼の隣は、少し狭そうだった。

「座れる？」

「ん、大丈夫」

座るとやっぱり少し狭くて、彼の腕とわたしの腕が触れ合うくらいだった。

やっぱり。なぜか彼の隣は緊張する。

「寝んなよ」

「はは、寝ないよ」

わたしは笑いながら答えた。

緊張していた。でも、触れた腕から伝わる体温がすごく心地よくて、これが人の温かさなのかなと思った。

危ない、眠くなりそう。

バスがすぐに駅に着いてしまうことを、少しだけ、ほんの少し恨んだ。

ショッピングセンターの近くの駅は無人だった。田舎にはよくある駅だ。

そこでも隣合って座ったけど、どうしても少しは緊張する。周りには誰もいなくて、静けさがさらにそれを煽っているようだった。外より温かい車内に入ると、わたしは少し眠気に襲われた。

「眠い？」

「少しね」

「いいよ、寝ても」

彼はわたしの方を見て言った。

「ええ？　　いいよ、大丈夫。寝ないよ」

言うてから、本当に寝なくて済んだ。なんだかいるんなことが頭に浮かんで消え、寝る余裕なんてなかった。

だってそうだ。寝れるわけがない。

彼は誰でも構わずデートに誘うような人間だったろうか。わたしの記憶にある彼なら違うはず。ならどうして？

わたしはなるべくそのことを考えないようにした。考えないようにしたけど、やっぱり緊張がとまらない。

ふと隣を見ると、彼は眠ってるみたいだった。つい、ふっと笑ってしまった。

各駅に止まることに起きるものだから、三つか四つ、駅を過ぎてから、

「眠い？」

と聞いた。

「うん、すっげえ眠い」

「寝てればいいのに」

「次、着くから」

寝てたわりに、ちゃんとアナウンスは聞いていたらしい。

実は、わたしは家に嘘をついて出掛けてきた。家族には「部活の友達五人くらいと遊びに行ってくる」と言ってきた。

だから実を言うと、迎えが来たときに二人でいる姿を見られることはまずかった。

そこまで考えてか、彼は玄関から見えない、階段の真ん中くらいで止まってくれている。

「じゃ」

「ん、風邪ひくなよ」

「うん」

どこまで気を遣っていて、どこまでが自然と出てくる優しさなのか、全く分からない。

何かあるかなと期待した自分がばかみだった。何を期待していたんだろうか、彼に。

家についてから、電車の中では感じなかった眠気が戻ってきた。

でもなぜかまたいろんな考えが頭を過ぎって、横になってもなかなか眠れない。

まだ、触れた腕が温かいような気がした。今夜眠れるかどうか心配になった。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7726b/>

---

side by side

2009年6月19日14時03分発行